２０２５年０６月０５日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２０頁

外見や居住地 印象格差

文人の武蔵野

村上春樹 ④

村上春樹の小説「夏帆」（「新潮」2024年6月号）と続編の「武蔵境のありくい――〈夏帆〉その2」（「新潮」25年5月号）には、外見を最優先したライフスタイルや価値観、東京都内周辺に浸透している居住地間のイメージ格差という現代的問題が俎上に載せられています。

「夏帆」は、好印象を抱かれそうな外見の男性「佐原」が、主人公の女性の夏帆と「ブラインド・デート」をしている場面から始まります。佐原は夏帆に、食事が終わるタイミングで実に穏やかな笑みを浮かべて「君みたいな醜い相手は初めてだ」と言ってのけます。佐原のルッキズムは、夏帆の心身に静かにのしかかっていきます。

武蔵境の駅前。夏帆は、同駅からバスで15分程度の一軒家に転居する（武蔵野市で）

佐原のルッキズムは夏帆が引っ越す動機に繋がり、居住地間のイメージ格差は夏帆の引っ越し先の選択に関与します。

「夏帆」には具体的な地名がほとんど登場しませんが、「武蔵境のありくい」には、原宿、品川、埼玉県浦和市（現さいたま市）、花畑、足立区、竹ノ塚、武蔵境、新小岩、新宿、武蔵野、ブラジルといった様々な地名が登場します。特定の地名に夏帆やその叔父の主観的な心象が刻まれ、作中に感情をともなった地図を描きます。

夏帆が住んでいたのは、埼玉県との県境にある足立区の花畑という町で、最寄りの駅は竹ノ塚でした。ありくいの謎めいたお告げに導かれて急いで引っ越した先は、「武蔵境の駅からバスに乗って十五分ほどのところにある平屋の一軒家」でした。武蔵境は「ひでえところだぞ」と夏帆に忠告しながら不動産屋を紹介してくれたのは、新小岩で小さな洋食レストランを経営している叔父さんでした。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。